

小さなエコの大きな意味と信仰

すべてのいのちを守るために

吉川 まみ
上智大学教授

⑫ 異文化に学ぶ価値の転換と祈りとエコ

早いもので連載を始めて1年がたちました。これまで、回勅『ラウダート・シ』に依拠しつつ、現実の日常生活の中で、小さなエコ実践の初めの一歩につながるヒントをさまざまな角度から紹介してきました。

お話ししました。

最終回に当たり、私たち人間と自然との関わりを根拠づける神との関わりを視野に入れ、衣食住の仕組みが継承される神宮の循環型システムに学びたいと思います。

「循環型社会とローカル

SDGs 地域循環共生圏

環境省によれば、日本の循環型社会とは、「天然資源の消費の抑制を図り、もって環境負荷の低減を図る」社会のことで、循環型社会を形成していくために、地域特性や循環資源の性質に応じた最適な規模の循環を形成することが重要です。

後半では、国際社会や地域社会全体の動向や、社会の産業構造などを俯瞰した上で、エシカル消費、デコ活、サステナブルファッション、生き物ブランド米など、日常生活のちょっとした選択がいかに大きなエコ実践になり得るかを

政策的には、炭素中立（カーボンニュートラル）、循環経済（サーキュラーエコノミー）、自然再興（ネイチャーポジティブ）の同時達成を目指しています。そのためには、各地域がその特性を生かした強みを発揮しながら、地域同士が支え合う自立・分散型の社会を形成していく必要があります。

を「地域循環共生圏」（ローカルSDGs/SDGs）持続可能な開発目標」と言います。連載後半でご紹介した徳島県上勝町のこみゼロ宣言や、神奈川県茅ヶ崎市の生き物ブランド米の取り組みなどはまさに地域循環共生圏の取り組みと言えるでしょう。

伊勢神宮式年遷宮と

資源循環のシステム

信仰の有無にかかわらず、多くの人々から「お伊勢さん」として親しまれている三重県の伊勢神宮は、天照大御神を祭る皇大神宮（内宮）と、衣食住の神とされる豊受大神神を祭る豊受大神宮（外宮）の二つと100余りの別宮、摂社、末社などから成る神社の総称です。

伊勢神宮では「衣食住」の全てが自給自足、自然の恩恵によって賄われ、それらは祭儀を通じて継承されています。食は日々の祭儀、衣は季節ごとの祭儀、住は20年ごとに、社殿と神宝を新調して大御神にお遷り願う神宮最大の神事「式年遷宮」によって継承されています。



三重・伊勢神宮で豊受大神神を祭る皇大神宮の御敷地。御敷地と豊受大神宮を建てる敷地のこ

仕組みがあります。しばしば循環型社会の原点として、この仕組みが国内外から注目されています。

式年20年の意味と

経年の価値

式年遷宮の「式年」とは一定の期間という意味です。伊勢神宮の式年がなぜ20年であるのか、文献には記されていないですが、神殿の耐用年数だけでなく20年が人生の一つの区切りの年月であることによるのではないかとされています。建築技術や伝統工芸の伝承は、マニュアル化し得るものではなく、人の知恵の伝承によるものであるが故に、人が育つために必要な基本的な時間が20年ということなのでしょう。

人が育つのを待つ20年を1300年以上も繰り返してきた式年遷宮の歴史。資源循環は言うまでもなく、この仕組みが継承されてきたことの意味の一つは、効率主義の中で速ければ速いほど良しとされるグローバル化された時間に対して、「待つ時間」への価値意識を創出したことではないかと思えます。

小さくて大きな
エコの原点として

回勅の中で教皇フランシスコは、人類と地球に影響を及ぼす諸

変化の間断なき加速と生活や仕事のペースのさらなる激化が対になっていると指摘し、それを「急かし」と表現しています。また次のようにも述べています。

「…人間活動が展開する速度は、生物の進化の自然本性にかなうゆつくりとしたペースと対照的です。加えて、こうした急速で間断なき変化は、必ずしも共通善や全人的で持続可能な人類の発展に方向づけられてはいません」(18項)

循環型社会に向けて、立ち止まって沈黙すること、祈ること、時間について知らず知らずのうちに私たちが支配する画一化された価値観に気付くこと。私たちの誰もができる小さなエコの第一歩です。

連載の最後に、式年遷宮が示す経年の価値だけでなく、創造主との関わりの中で、改めて「急かし」から抜け出すことの意味を味わいたいと思います。

「話しているのは、心のあり方についてです。それは、落ち着いて注意深さをもって生活しようとする姿勢、展開を予想したりせずに全身全霊をもって相手と向き合おうとする姿勢、懸命に生きるよう神からいただいた贈りものとして一瞬一瞬を受け止める姿勢です」(同226項)

聖母月、マリア様の取り次ぎによって、これからも共に歩めますようにお祈り申し上げます。